

【阿部伸一先生】

演題

「技工サイドでイメージしたい加齢による形態と機能の変化」

抄録

近年の高齢社会により、これまでみられなかった歯槽骨の高度の吸収症例などが増加の一途をたどっています。これら難症例患者の口腔内で、義歯の形態はどうあるべきかについては、解剖学的な多くの要素を考慮しなければなりません。それは失われた顎骨に代わる義歯床の形態、人工歯の配列場所、歯肉の形態など様々です。総義歯による無歯顎治療での到達目標は、咀嚼、嚥下機能などを個々の患者が満足する形で再現することであると考えます。そこで本講演では、機能する義歯を作製するためには何を考え、どのような機能解剖学的な知識が必要であるのかについて考えていただきます。

口腔とは言うまでもなく空間です。この空間が歯を喪失した後、経時的に広がります。この原因は顎骨が徐々に吸収していくことに他なりません。この顎骨には筋組織をはじめ多くの軟組織が周囲を取り囲み、咀嚼器官としての口腔周囲を形作っています。顎骨は経時的に吸収するにも関わらず、周囲の軟組織は有歯顎時の形態を残し機能します（粘膜の変化などは除く）。デンチャースペースを模索する場合、「広がっていく進行性の空間を埋める」という考えだけでなく、周囲の筋組織をはじめとする軟組織が、スムーズに機能することも考慮することが重要となります。よって本講演のはじめに、顎骨の吸収の特殊性を解説し、次に咀嚼、嚥下機能にかかわる顎骨周囲軟組織について、機能解剖学的な解説をさせていただきます。

【上田貴之先生】

演題

オーラルフレイル・口腔機能の低下に対応する義歯のマネジメント

抄録

高齢者では、義歯装着者が依然として多数存在し、義歯の製作や調整は日常臨床の中心の1つです。いわゆる義歯の難症例と呼ばれる状態は、顎堤の吸収が顕著であったり、上下顎の対咬関係に問題があったりと、従来から形態的な視点を中心に考えられてきました。しかしながら、オーラルフレイルや口腔機能低下という視点を義歯治療に取り入れることで、新たな問題点も見えてきます。

例えば、「食べにくくなってきた」と患者が訴えた場合、どのような原因が考えられるのでしょうか。義歯装着後の長期経過の中で、義歯や残存歯の状態は変化していきますが、それと同時に口腔機能も変化します。舌や口唇の機能が衰えることにより、咀嚼能力が低下することもあります。漫然と咬合接触状態や義歯床と粘膜面の適合状態のみで評価を行いま

すと、そのような機能低下を見逃すことになりかねません。

2018年4月の診療報酬改定では、「口腔機能低下症」が歯科の新たな病名に加わりました。2024年4月1日に日本老年医学会、日本老年歯科医学会、日本サルコペニア・フレイル学会は合同で、「オーラルフレイルに関する3学会合同ステートメント」を公表しました。統一的なオーラルフレイルのチェック項目（Oral frailty 5-item Checklist：OF-5）も提唱されました。OF-5は、残存歯数、咀嚼困難感、嚥下困難感、口腔乾燥感、滑舌低下の5つの質問から構成されており、2項目以上に該当するとオーラルフレイルと判定されます。

これらの考え方を、義歯の診療でどのように生かしていくのかについて、本講演で解説したいと思います。

【中島純子先生】

演題

顎補綴および口腔内装置による咀嚼・構音・嚥下機能へのアプローチ

抄録

口腔がんの治療予後の向上に伴い、地域社会で生活をされている口腔がんサバイバーが増加し、顎欠損や舌欠損を有する方の歯科治療が、大学病院など以外でも行われる機会も増えています。一般的に、歯や顎などの欠損に対する補綴装置は、形態を回復することにより咀嚼・構音・嚥下機能の改善を図ります。一方で、顎や周囲軟組織の実質的な欠損を伴わない場合でも、口腔領域の舌や軟口蓋といった軟組織の活動性の低下により、咀嚼・構音・嚥下機能の障害が起こります。このような機能的な嚥下障害や構音障害は脳血管障害や神経筋疾患の患者にみられ、近年の摂食嚥下リハビリテーションの普及、口腔機能低下症という疾患の確立に伴い、顎補綴を起源とする補綴装置が応用されるようになってきました。

その代表的なものが、舌接触補助床（Palatal Augmentation Prosthesis: PAP）です。PAPは、舌の運動障害あるいはボリューム不足による構音および咀嚼、嚥下障害に対して、舌が接触できるような厚みを上顎の義歯床の口蓋部に持たせることで口腔機能改善を図る装置です。また、神経麻痺や手術に伴う軟口蓋部の挙上不全による鼻咽腔閉鎖不全に対する軟口蓋挙上装置（Palatal Lift Prosthesis: PLP）のニーズも高まっています。

口腔がんサバイバーの高齢化や PAP や PLP の対象となる患者さんは訪問歯科診療の対象となることも多く、地域歯科医療において顎補綴やこれらの補綴装置に対応できる歯科技工士、歯科医師が求められつつあります。本講演がその一助となれば幸いです。